

【学位論文審査の要旨】

本学位論文は、地域で暮らす男性高齢者の社会的交流の促進に寄与するプログラムを開発するための一連の研究成果をまとめたものである。社会とのつながり（友人・知人との交流、地域活動への参加、就労、ボランティア活動など）と健康との関係は、複数の疫学調査で明らかにされている。男性高齢者は孤立を強める傾向にあることも広く知られている。申請者はこの性差に着目し、男性の支援ニーズに即したプログラムを開発、効果検証を行った。男性の社会的交流の場を提供するプログラムはすでに多数あるが、社会的交流の促進を意図して研究開発されたプログラムは数える程しかない。本学位論文は当該分野への貢献度が高く、意義のある成果といえる。

プログラムの開発は、Marjorie(2005)の地域における健康増進プログラム開発手順に準拠する形で体系的に行われている。具体的な手順は、①事前計画立案、②ニーズ評価、③プログラムの計画（理論的根拠、目標等の明確化）、④実施と評価、であった。その成果は副論文3編と主論文で明確に報告されている。最初の副論文では、社会的孤立の予防のための糸口を探る質的研究を実施し、訪問サービスを利用する男性高齢者における「孤立を深めるプロセス」と「支援の必要性」を論じた。次の研究では、地域で自立して暮らす女性高齢者と男性高齢者それぞれにおける「人との交流の維持に関する戦略や態度」を論じ、男性高齢者特有の支援ニーズを鋭く示した（副論文2,3）。特に、女性高齢者が「他者と関わる方略を持つ」のに対し、男性は社会とつながる「対策を保留」し「孤立に向かう方略」を潜在的に選択する傾向があるとした論考はユニークであり、副査からも高く評価された。

主論文では、副論文の成果をもとに理論的根拠と目標を定めて開発した介入プログラムの内容および、その介入効果を報告している。プログラムは理論的基盤として人間作業モデルを選択しており、理論的に導かれるプログラムの目標（介入成果）を「社会参加の促進」と「社会活動の満足度向上」としている。プログラムの構成は週1回（100分）、全12回である。この理論選択と目標設定は、根拠をもって行われており妥当と判断できる。全12回（週1回100分）の構成は、健康増進を目的とした一般的な地域プログラムと同程度の時間・頻度であり、実用性の点から評価できる。プログラムの効果検証は群内前後比較試験と質的データを用いた混合研究法（収斂型）で実施され、目標とする介入成果が得られたことを示している。プログラムは適切に実装され、男性高齢者の社会参加を促進する可能性があると結論するには、説得力がある。

以上の通り、本学位論文は論理的に構成されており、論旨も一貫していた。資料の収集および分析には、データの特性と目的に即した方法であり、かつ国際的なガイドラインに準拠した方法が選択されている。倫理的な配慮も十分になされている。

●最終試験

最終試験では、開発したプログラムの目的の妥当性、想定される対象者、社会的孤立の実態、今後の研究課題などの質問があり、申請者はこれに適切に回答した。介入プログラムの参加者は公募で集めたことから、比較的積極的な方であると思われることを誠実に説明し、本研究結果の科学的な一般化についても慎重さが求められることを真摯に認めた。その上で自分のアイデアや見解を述べるなどの確に応答した。プレゼンテーションおよびコミュニケーション能力は十分であり、当該専門領域の見識については高い水準にあると判断された。すでに次の研究に着手しているなど、今後の研究意欲も認められ、誠実な態度も好印象であった。

以上より，本論文が博士学位論文に値し，申請者が博士の学位を授与されるに相応しいことを認め，合格と判断した．